

---

# 紅ひらり

東雲咲夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅ひらり

### 【Zコード】

Z9715D

### 【作者名】

東雲咲夜

### 【あらすじ】

『綺麗な赤い桜が見たいんだ』それは、難しいようで簡単な望み。叶えたくとも、叶えてはいけない願い。それでも桜に魅入られて…咲かせてしまつただろ。』

夕日が差し込む教室。ぽかぽかと暖かい放課後。  
俺は窓から、ひらひらと風に運ばれていく桜の花びらを眺めていた。

「なあ

「ん……なあに？」

俺の向かいで必死に勉強しているのは、幼馴染の咲良。さくら

「サクラってさ、綺麗だよな」

「祐治、どうしたの？ いきなり褒めるなんて……」  
教科書を見ていた顔を上げて、俺を見ながらきょとんとしている。  
見た目はかわいいのだが、少々頭の具合が悪い。  
あまり成績の良くない俺よりもひどいのだ。  
いわゆる、赤点レベルということ。

「馬鹿。俺が言ったのは、花の桜のことだよ」

「……」  
インストネーションでわからないのだろうか……？ 俺ははつきり

と発音したはずなのだが。

「なんだ、そつちの桜か」

「そつちもあつちもあるか。ほら、早く勉強しろ」

「うわー冷たいね」

ぶつくさ言いながらも勉強を再開する彼女。

大体、こんなに暖かい春の日は、早く家に帰つて昼寝するのが一番なんだ。それなのに何で俺は彼女と勉強なんかしてるんだか。

毎度のことながら、俺は押しに弱いのだと思い知らされる。

小、中、高校と同じだつたせいなのか、幼馴染だからなのか。

新学期始めの試験、中間試験、学期末試験……そのたびに俺は彼女に呼び出されている。

「のままじや進級できない、とか……答案用紙が赤すぎる、とか。  
赤いも何も、ほとんど合っていないのだから、おのずとバツが増え

るわけで。

それに比例するかのように、赤色が増えていくというわけ。

この間の学期末試験の答案には 青色まで登場してしまった。

担任のお小言といふか、注意といふか脅し？

彼女の答案には、そのうち紫色でも登場するんじゃないだろうか。

かなり不安だ。そして赤、青、紫の答案用紙は色々な意味で怖い。

まあ、何とか今まで無事に切り抜け、進級もできただが……まだ、

進級が一回もあるとは。

正確には、進級と卒業だが。……俺は家庭教師じゃないんだから

彼女の成績が上がって、俺の成績が下がりそうだ。

「あーっ、やっと終わったあ

大きく伸びをしながら、教科書を閉じている。

本当に終わつたんだろうか？

怪しく思いながらも、ノートを見てみると。

「……おー。ちょっと待て？ なんだ……この所々開いてる隙間は。書きかけみたいのも」

「え？ ああ。そこさ、解らないから」

「教科書見ながらでも書けといったはずなんだが

「見てもわからないから」

「解らないんじゃなくて、それは解ろうとしてないだろ？……お前

ふうっと溜息をついて、ノートを見る。

問題の下には、妙なスペースが開いていて。

たまにスペースには英語が書いてある。

「おい、なんで数学で英語なんだ？」

「何か同じような感じじゃない？ 記号とローマ字」

窓の外を眺めながら、答える彼女。

俺は 頭が痛くなつた。

ノートに赤ペンで解答を書き込んでから、彼女の隣へ行き、桜を眺める。

4階の方がよく見えたような気がする。  
夕焼けを受けて、緋色へと変わる桜色。  
ほんの僅かだけれど風が吹いていて、ゆつたりと落ちていく薄い花びら。

近寄ると、きつとふんわりと香るのだらう。  
決してぐさくはない、けれどもすぐには消えてしまわない桜の香り。

綺麗な薄桃色をした桜、白色が強い桜、赤色が強い桜に、それらが調和した桜。

俺は……桜というものが大好きだ。

「それでさ、桜がどうしたの？」

眺めながらうつとりしていると、いきなりそんな事を彼女が聞いてきた。

「どうしたって、何がだ？」

「やだ、忘れたの？ さつき言つてたじやない。桜は綺麗だよなつて」

……ああ。何かさつきそんなこと言つたような気もあるようなしないような？

まさか咲良と間違えられるとは考えもしなかつたな……じゃなくて。

「よくわ、桜の下には死体が埋まつてるつていうだろ？」

「あー……なんか聞いたことがあるかも」

昔、どこかで誰かに聞いた話。

桜の木の下には、人間の死体が埋まつてるという。だから、桜は綺麗なんだ。

人の血を吸つて、色鮮やかな花びらを咲かせているのだと。

そんな、たわいのない話。

けれど、どこか信じられる話。

「あれってさ、本当なんじやないかと思つてるんだよな、俺」「祐治がそんな事信じるなんてねー何で?」

「いや、だつて桜綺麗だし」

「まあ、確かに桜はとつても綺麗だし、大好きだけじゃ……なんか違くない?」

首を傾げられてしまった。

今のは確かに言い方を間違えたかもしれない。

「うちの学校の桜つてさ、毎年満開状態だろう。栄養がいいのかなつて」

「そういうえば、咲かない年つてないらしいね」

この高校の桜が見たいから入学する人がいるとか、いないとか。「で、栄養だから……人間が埋まってるつて?」

「そういうことだよ。うちの桜の木の下には、美人が埋まってるんだよ、たぶんな」

「じゃあ、枯れてる桜には何が埋まってるの?」「咲良みたいなのが埋まってる」

「…………」

頼むから、無言で俺を見ないでくれ……怖いからさ。けつこう美人なだけに、睨まれると迫力あるんだから。「でつ、でもさ、不思議なんだよな」

「……何が?」

まだちよつと怒つてるかもしれない。

「人間が埋まってるならさ、何で桜色なんだろうな」「はい?」

「だから、どうして赤い花びらにならないのかつて」

人の血液は、赤い。間違つても、緑とかピンク色ではない。なのに、桜は多少の差はあるものの、皆桃色だ。

「えー? ん……量が足りないんじやないの?」

「一人じゃ足りないのか……。や、頑張ればどうにか……」

「何人埋めるつもりよ。つて、いつの間にか、埋まってるの前提で

話してゐるわね

「前提じゃなくて、埋まつてゐるぞ」

「何で言い切れるのよ」

「埋めたことがあるから」

「えつ？」

しばらく、教室の中に沈黙が流れる。

いつしか、夕日も傾いて……もうじき夜が来ようとしている。

「理科の」

「？」

「理科の実験とかで、食紅とか色々使つだろ？ あれ埋めてみたんだよ」

「つ。なんだ。そつちか。驚かせないでよ。で、結果はどうだつたの？」

「……別に変わらなかつた」

「ふつ。そりやそりでしよう。どれくらい入れたのよ？」

「冬から、春まで毎日埋めにいつた」

「食紅を……毎日？」

「そう、まいにち」

小さいビンだつたり、プラスチックの入れ物だつたり。バイト代からお金を出して。実験をしてるんです、と言つて。毎月、三十一個の食紅を店に買いに行つた。正確には、毎日一個を。毎晩のうちに買いに行つて、夜になつたら、桜の木の下に埋める。埋めるというよりも、流すという表現が正しいかもしれない。粉末を水に溶いて、液体はそのまま。

「なんで、そこまでしたの？」

「赤い……赤い桜が見たかつたから」

「綺麗な、赤い桜を？」

彼女が、いつの間にか俺から少し離れている。なんで彼女は離れたんだろう。

「そう。薔薇だって、チュー・リップだって、赤色の花があるのに、

なんで桜は赤くない?」

「タンポポとか……そういうのは、赤い種類はないよ?」

「それは、やつたことがある」

「……どうだつた?」

「植木鉢でやつたら、赤い花が咲いたよ。とつても鮮やかな、朱色よりも濃い赤だつた」

花びらをちぎってみても、断面は赤くて。茎も切つてみたけど、やつぱり赤。

根も同じだつた。

真つ赤な、異端のタンポポ。とても、綺麗だつたな。  
でも、所詮紛い物の赤。偽者の赤なんだよ。  
食紅とかは、人工的に作られたものなんだから。  
俺はまだ、人を埋めた事はないんだ。

人の、血液を吸つて咲く桜は、なによりも美しいだらうなと思つよ。

血には、血小板、白血球、赤血球が含まれていて、生きているんだから。

俺は、ぼうつと考える。恍惚と、時に朦朧としながら。  
彼女は、じつと黙つて窓の外の、桃色の桜を眺めている。  
「そんなんに言つならむ、また桜に埋めてみれば?」

「……桜に?」

「そうよ。そんなに気になるのなら、またやればいいじゃなー」

「食紅?」

「もう、青いやつとかもやつちやえば?」のせこまとめて

それにさ……と彼女が言つ。

「私も、赤い桜……見てみたいな」

俺の方を見ながら、やわらかく微笑む彼女。

少し色素の薄い、淡い茶色をしたサラサラの髪。

澄んだ茶色をした大きな、くりつとした瞳。

すつと通つた鼻梁に、シャープは顔の形。

桜も好きだけど　咲良も俺は好きだ。

だから、勉強とかにも付き合つてやつてるんだろう。

でも……咲良。

そんな顔で、表情で、俺に笑いかけないでくれないか。  
俺は、どうしても見たくなつてしまつじやないか。

「祐治つたらさ、さつきから瞳がギラギラしてゐるんだから。やらな  
いと、落ちつかなそつ」

「お前は、手伝つてくれるのか」

ほんとうに、てつだつてくれるのか、さくら。

「いいわよ？　お金は出れないけどね？　もちろん、祐治も手伝つ  
てよね」

……それならば。

「食紅は用意しておくから……明日の深夜零時に学校でやらないか」

「深夜？　うーん、別にいいけどわ」

「忍びこめるよな？」

「たぶん大丈夫じゃない？　先生とかけつけサボつてるからさ。  
どこに行けばいいの？」

「学校の裏にある、一番大きな桜の木の所に」

「わかった。じゃあ、今日はもう帰るね？」

「ああ。また明日」

彼女は教科書をすばやくしまうと、廊下を走つていつた。  
バタバタ音が教室にまで響いてくる。

俺も……帰らないと、な。

これで、やつと試す事が出来る。

俺は、につこつと微笑む。

深夜の学校には、誰もいない。

この高校はどうなつてゐるのか、深夜になると、宿直の先生まで  
いない時がある。

忍び込んだり、何かをするのには好都合。

俺は通学用のカバンを肩に掛けながら桜の木の下へと急ぐ。

一番大きな桜の木なのに、裏の方にあるせいか、あまり人がいない。

今年は、何故か少しだけ花の数が少ない……桜の木。でも、もう大丈夫。来年は、きっと満開だからな。

それに、今日は満月だ。

空を見上げると、灰蒼い月光が降り注いでいる。

今日は、いい日だな。

少々重いカバンにやきもきしながらも、桜の木へと辿り着いた。そこには、もうすでに彼女がいた。

「咲良」

「あ、祐治やつと来た！ 遅いよ」

彼女が手を振りながら、走りよつてきた。

何故だか彼女の左手首には包帯が巻いてあつた。

「悪かつたつてば。カバンが重かつたんだよ」

「重くなるほど何入れてるのよ」

「ん？ これこれ。必需品」

カバンを開くと、月光に反射して、それがきらりと鈍く光った。

「……なに、それ」

俺はカバンから折りたたみ式のそれを取りだす。

「何つて……スコップ」

「なんでそんな大きいの？ しかも新品」

「大量に埋めるから。入れ物ごと。家になかつたから、買ってきた」

「……」

俺は訝しげな彼女を横目に、深い穴を桜の木の下に掘り始めた。ザクリッザクリと土を掘る音が、静かな月夜に響く。

それをじつと見ている彼女。

俺はひたすら掘る。深い、落とし穴みたいな穴を。

土の匂いに、自分の汗の匂いに、植物の匂い。

それが交じり合つて鼻腔を刺激する。

鼻がむずむずしてくるな。

めげずに掘り続いていると、ずいぶん深くなつた事に気づいた。

そろそろ穴から出ないと、出られなくなる。

土の表面はじつとりと湿つていて、力を入れると、指は突き刺さる。

だが、それ以上に強い力を込めると、崩れてしまつ。

「おい、お前届くか？」

「だいじょうぶ……ぎりぎりかも」

一所懸命手を伸ばしている彼女の手を掴む。

「そのまま引っ張れるか」

「ちょっと待つて……」

少しすると、身体が引っ張られる感覚。

俺はそれを利用して、壁に足を掛ける。崩れてしまつ前に、上へと。

泥まみれになりながらも、なんとか出口付近まで這い上がれた。

「まったく、何で梯子とか持つてこなかつたのよ……」

「そこまで考えてなかつたんだから、仕方ないだろ」

「祐治……重い」

「一応俺も男だからな」

「重いから……疲れちゃつた」

ふわふわと身体が下に引っ張られる感覚。

「……っ？」

感覚は、一瞬で。気がつくと、俺は穴の底へと落ちてしまつていった。

彼女が、手を離したのか。

「咲良、危ないから急に手を離すなよつ。疲れ倍増するだけなんだから」

「さう? あと一仕事だから、そんなに疲れないよ?」

「あと、一仕事? いつたい何が?」

訳がわからず穴の底で呆然としている俺に、上から何かが降ってきた。

「ぱりぱりと降つてくるこれは……土。

「おい、咲良！ お前一体何考えて

「何つて、祐治と同じこと考えているだけ」

俺と同じこと？ それはつまり。

「私の事をさ、埋めようとしてたでしょ、祐治。桜の木の下に埋めて、赤い桜が見たいって思つたんでしょう？」

「それはつ……食紅で」

「栄養は、血液。入れ物は私 違う？」

「俺は……お前のことが好きなんだ。だから、そんなことするはずがつ！」

「私だつて、祐治のこと、ダイスキだよ？」

「なつ」

「ダイスキだから、祐治の赤い桜が見たいなあつて思つたの。祐治があんまり言つから、見たくなつたの」

「そんなのは……間違つてる」

「彼女の顔は、影になつてしまつて、ここからはよく見えない。

今、彼女はどんな表情をしているのだろうか。

声は楽しげだけれど……顔は？

恍惚としているか、悲しいのか。

俺には わからない。

「私が間違つてるなら、祐治もそうでしょ。それに間違つてるとか正しいとかじやないよ」

いつの間にか、土が首の所まで積もつてきていた。

「私は、あなたの桜がみたいの」

赤い 綺麗な桜が見たい。それは俺が思つていたこと。

同じことを彼女が望んでいるというのならば……俺に何ができる？

これは俺自身がまいた種なのだろう。

ならば、これは自業自得？

それとも、彼女の考えに気づけなかつた愚かさか。  
「祐治の桜もいいけど、私の 咲良の桜つていうのもいいよね。  
だから、考えたんだ」

彼女の姿がほんの数秒見えなくなつてから、何か音がした。  
刹那、何か土とは別の……液体が降り注いできた。  
僅かに鼻先をくすぐるこの鉄のような香りは

「ついさつき、取立てだよ。まだ固まつてない」

笑い声が聞こえる。

「私の血も埋めれば、祐治と一緒にだよね」

「……これ、お前の血なのか」

「そう。一人の血で赤い桜を咲かせるの。とってもいいよね  
ああ、もうすぐ口が埋まつてしまつ。  
しゃべれなくなつてしまつ前に……伝えておこう。」

「咲良」

「なあに？ 何か言いたいことあるの？」

「愛してたよ」

すぐに口が埋まつてしまい、耳も埋まつた。

真つ暗闇に包まれていたけれども、俺には彼女が笑つているよう  
な気がした。

「私も、愛してるよ……祐治？」

俺の、意識が……薄れしていく。

閉ざした瞼に映る、残像は……月光に照らされる

微笑んだ咲

良。

また、今年も春が来た。  
今回の進級試験……けつこうギリギリだつたよ。  
我だけじややつぱり駄目みたい。  
また誰かに勉強教えてもらわないとなあ。  
私の事、見ていてね。

祐治がいなくても、平氣だから。

後悔は、していないから。

忍び込んだ夜の学校は、とても静かで。

夜空には、あの日みたいに綺麗な満月が顔を覗かせていて。  
誰がいなくなつて、何かが消えても、変わらずに季節は巡り続け  
て。

過去も、今も、これから先の 未来も。

「ねえ……祐治？ 綺麗だよね、桜」

あの人を埋めた桜の木は……今年は狂い咲いた。

昼間は桃色。夜は……紅。

他のどの桜よりも綺麗な花を咲かせて。

色鮮やかな花びらを落として。

ざわり、と春風が桜を揺らす。

真つ赤な……とつても綺麗な赤い桜。

ひらり……ひら……り

赤い、紅の花びらが風に吹かれて舞い落ちる。

ときおり、舞いあがつて、満月へと花びらは踊る。

辺り一面に漂う、なんともいえない甘い香り。

祐治と、私の桜の香り。

私がここを卒業しても、枯れずに……咲き続けてほしいな。

私たちの桜。

「ねえ……とつても綺麗な、赤い桜。咲いたよ？ ちゃんと見てる  
よね……」

ちゃんと赤い桜を咲かせてくれて、ありがとうね祐治。  
でも、最後にあなたは言つた。

『愛してたよ』

愛している……ではなかつたね。

興ざめ、したのかな。

今となつてはもう解らないけれど。

私は、祐治が今も私を……咲良を好きであることを信じてるから。

あなたが咲かせてくれた、この満開の紅桜の下で。  
ひとりわ強い風が吹いて、花びらが舞い踊る。

眼の前に広がる……赤い花吹雪。

私の願いに反するかのように……花びらは散り続ける。  
鮮血のよう、鮮やかなまま。

まるで散り急ぐかのように。

花吹雪が止んで、静寂が訪れる。

「また来年も来るから……咲かせてね。綺麗な桜」

ごつごつとした樹皮に手を滑らせる。

不意に、一枚の桜の花びらが舞い降りてきた。

私の目の前に、狙い済ましたかのように。

ふわふわと舞うそれを、手のひらに収める。

「……やだ。お小言のつもり？」

思わず、泣きそうになってしまった。

おそらく、この手のひらの中の一枚だけであるひつ花びら。  
透き通るかのように綺麗な……蒼い花びら。

ねえ、桜の木の下にはね……人間の死体が埋まってるんだよ？  
でもね、それだけじゃないんだよ。

悲しみも、喜びも。愛情も、憎しみも。

色々なものが埋まっているんだよ。

だから、桜は綺麗なんだよ。

だから、桜に心奪われるんだよ。

何かを奪つて咲いているから 綺麗に咲き誇るんだよ。

誰かに見てほしいから、一生懸命に花びらを散らすんだよ。

満ちゆくものよりも、消えゆくものに关心が行くでしょう？

だから 忘れないでいてね。

サクラが咲いていたということを。

赤い……綺麗な紅のサクラがいたということを。

忘れないでね。

散りゆくサクラに、想いを乗せるから

。

(後書き)

お読みください、ありがとうございました。

そろそろ桜の咲く頃かな~と思いまして。

桜は、春だけ咲くから綺麗だと思うんですね。一年中咲き誇つて  
いたら、それが当たり前になってしまつて綺麗と思わないのだろう  
な、と。

人も、同じですよね。刹那だからこそ、美しく。  
まあ今更当たり前のことですけれど。

何かを感じていただけたのなら、幸いです。  
感想などありましたら、お気軽にどうぞ。

……あなたの桜は、咲きましたか?……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9715d/>

---

紅ひらり

2010年10月8日12時49分発行